鎮魂の灯

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅を聞いたのは、ソ連・満州・朝鮮三国国境の図們の山奥の陣地だった。その後、私たちは武器を取り上げられ、ソ連軍の収容所に入れられた。

収容所では「東京ダモイ（帰国）」まで待つようにと言い渡された。

九月半ばごろ、[16]ウラジオストック経由で東京にダモイすると聞かされ、千人ずつの梯団（作業隊）に編成された私たちは、夏服のままの軽装で、日本に帰ることばかり夢見ながら徒歩で間島からソ連と満州の国境を越えて[17]クラスキノの駅まで行軍した。

クラスキノは満州から送られる日本軍の集合場所。ここから家畜用貨車に牛馬同様

に積み込まれ鉄の扉に閉ざされて、着いた所はシベリア[18]の中のハバロフスク[19]州の中央コムソモリスク[20]市郊外。

私たちはアムール[21]川沿いの原始林の中に建てられた半地下の丸太小屋の小さな収容所に入れられた。それは十月末ごろだった。

私たちの収容所はコムソモリスク第八収容所分所で、収容人員五百人。私は第三作業隊長として毎日原始林に入っての作業に当たった。私たちはよく働いた。手斧とノコギリで木を切り、枝は薪として積み重ね、毎日百パーセントの**ノルマ**をこなした。

それで第八収容所の中ではハラショー（素晴らしい）作業隊として、ソ連収容所長モスカレンコ大尉（顔が赤く鼻が高く、いつも怒鳴ってばかりいるので「赤鬼所長」と呼んでいた）から特別に可愛がられるようになった。

しかし、シベリアは地獄だ。零下四十度以下の厳しい寒さの日々が続き、過酷な労

※詔勅…天皇が意志を発表する公文書。
※ノルマ…強制的に割り当てた作業の量。戦後強制抑留者が日本に伝えた語。

働に加え食糧の不足によって私たちの身体は次第に衰弱していった。

「働かざる者は食うべからずが共産党の鉄則だ」

と言って、**ノルマ**の達成具合によって食物を差別された。そのため、病弱な者は回復の機会を失い、健康な者までもが栄養失調となる有様であった。

また、生活環境の悪さから、伝染病なども発生し、死亡者は相当な数となった。私は主として森林**伐採**の作業中隊長として抑留生活を送る中で、数限りない悲惨な地獄の絵巻を見聞きしてきた。

その中で、今思い出しても胸の痛くなる話を二つお話ししたいと思う。

第一話　生命の灯

厳しい寒さに空腹と重労働の三地獄の中で生きるには、抑留者同士が助けあい、励ましあって、希望を失わず耐え抜くことが大切だ。

幸い、私の中隊は若い**現役兵**が多く、内務班長だった私を信じて、明るく強く働い

てくれたため、自ら良い環境を作ることができた。だが、収容所では栄養失調症患者が続出していた。

栄養失調症になる者の多くは、食生活に原因があった。それは、配分された**燕麦**や**高粱**のお粥を**飯盒**に入れ、さらに黒パンを粉にして混ぜ、湯水をいっぱいに入れてグラグラ煮立て岩塩で味付けし、その汁をガブのみする。そんな食べ方が当時流行していた。

私もやってみたが、確かに一時は満腹感がある。それは腹の中が水でいっぱいになるからだ。ところがこの食べ方を一週間も続けた者は、胃腸の働きが悪くなってやせこけてしまう。

※ノルマ…51ページの注を参照。
※現役兵…現在ある部隊に配属されて、軍務についている軍人。
※燕麦…麦の一種。
※高粱…中国産のモロコシ。
※飯盒…19ページの注を参照。
※伐採…山などから木を切り出すこと。

私は戦友たちに、
「配分された食糧は何でも良くかみ、胃に負担がかからないよう唾で丸めてのみこめ」
とよく話した。
空腹に耐えながらも配給された粥や黒パンをていねいに大切に食べる者は生き残り、そのような食べ方に耐えきれず「水っ腹」で一時の満腹感を求めた者は、栄養失調症患者になってしまった。
たった半月の生活態度で、同じ労働に従事しながら生死の境を分けたのもこの時期の収容所だった。
また、信じられないような死もあった。他の中隊から十数人の戦友が私の隊へ転入してきた。その転入者の多くはこの「水っ腹」愛好者だった。その中で一番若いA君が強度の栄養失調症だと阿部軍医から通報があった。A君は少し動作が鈍いようだったが、病気の気配は何もなかったので毎日作業にかり出されていた。
栄養失調症患者の多くは特別な徴候もないので、ソ連側から作業を休むことは許

されず、もちろん休養室にも入れてもらえず、ほとんど作業にかり出され、そして**伐採**作業場でポックリ死んでしまうのである。

それは、風もないのに枯木が突然倒れるのと全く同じように。それこそ当の本人でさえ、予知するすべはなかったようだ。

昭和二十一年三月末、日本では早咲きの桜が咲き始めるころ、私はまだ北斗七星がキラキラ輝く夜半、偶然トイレでA君と一緒になった。室内へ入って**ペチカ**を囲むとA君は黒パン一切れを**ペチカ**の上に載せながら、

「渡辺さん、私は何だか眠くてたまらない。少し寝たいので、このパンが焼けたら起こしてください」

と言って、毛布の中にもぐり込んだ。私は、

「いいよ、焼けたら起こすよ」

※軍医…27ページの注を参照。
※伐採…53ページの注を参照。
※ペチカ…ロシア風の暖房装置。

と何気なく引き受けて、パンの香りに自分の空きっ腹が鳴るのを堪えた。

約五分くらい経ったころ、こんがり焼けたので、

「A君パンが焼けたぞ」

と呼んだが、起きてこない。

「オイ、どうした」

と本人を揺り動かすと、もう亡くなっていた。私は呆然としながらも、そのパンをちぎってA君の口の中へ入れてあげた。こんなことなら凍ったパンを私が食いちぎって温め、口移しにしてでも生きているうちに食べさせてやるべきだった。悔しさで涙がこぼれた。

A君のやせ細った手を胸に合掌させ、その手に黒パンを握らせて、同室の戦友を起こして短いながらも通夜を営んだ。そして翌朝、ギョロ目の阿部軍医と菊池衛生兵に

※軍医…27ページの注を参照。
※衛生兵…27ページの注を参照。

深夜の出来事を報告した。阿部軍医は、

「またか」

と、大きなため息をついて、

「栄養失調者はこんな死に方が多いよ。それでも渡辺さんに看取られただけでも、うかばれるだろうよ」

と慰めてくれたが、私はこの地獄の運命をつくり出したソ連を呪うだけだった。

今でもパンを焼くたびに、このことを思い出し、食べる前にA君やシベリアで亡くなった戦友の冥福を祈っている。

第二話　鎮魂の灯

昭和二十一年七月初旬の夕方、ソ連側収容所長モスカレンコ大尉より、「中央病院から送られてきた日本人捕虜の遺体埋葬作業を、特に第八分所で行うように」と命令があった。

私は戸惑った。遺体埋葬を喜んで引き受けるわけにはいかない。早速、中隊に帰り、全員を集めてこの話をしたところ、

「我々、渡辺中隊は、**伐採**作業で生きてきた中隊だ。そんな辛い仕事は、ほかの中隊にやらせてもらってください」

という意見が大半だったが、

「隊長、おれたちは日本人だ、助けあって今日まで生き抜いて力尽き、亡くなった戦友を葬ってやることは我々の務めではないか、みんなでやろうよ」

と、長年の戦友である高橋君と鈴木君が私に味方してくれた。この一言は抑留者である私たちの魂をゆさぶった。そして、

「今日は人の身、明日は我が身の**三途の川**にいる俺たちだ。みんな我慢して、気持ち

※軍医…27ページの注を参照。
※鎮魂…死者の魂をなぐさめ、しずめること。
※伐採…53ページの注を参照。
※三途の川…人が死後、七日目に渡るという冥土への途中にある川。
※冥福…22ページの注を参照。

良く埋葬作業を引き受けてもらいたい」
と心からお願いした。
あれこれ話しあっていると、モスカレンコ赤鬼所長が中隊に現れた。お供にチグノフ政治部中尉、ナターシャ女医中尉、阿部軍医、それに後藤大隊長などを引き連れてのお出ましである。そして、コムソモリスク地区収容所本部長命令で「第八収容所長は所員をあげて中央病院より送致された日本人捕虜の遺体埋葬を行うべし」との命令が出された。そして、その実行のため、「我が収容所内の渡辺中隊に、この作業を命令する」と宣告された。
翌日からは、新しい仕事の準備で忙しかった。私は中隊に墓地測量班、穴掘り班、遺体運搬班、埋葬班、墓地整備班などを編成し、作業手順を定めるなど、準備万端、作業開始に備えた。
三日目の晴れた朝、収容所の西北約六百メートルの小高い丘の広場へ、収容所長を先頭にチグノフ政治部長、ナターシャ女医、後藤大隊長、阿部軍医などに連れられて

集合した。

見れば背後には丸い山があり、山と丘の間の窪地には無数の遺体が裸のまま捨てられてあった。まさに地獄である。

冬のシベリアでは日本式の埋葬は不可能だった。収容所で私たち抑留者が死亡すると、その場で日ソの**軍医**が立ち合って「死亡調書」を作り、終わると身近な戦友が二、三人で野辺の送りの準備をする。

今にして思えば酷い話であるが、通夜を終えた戦友の遺体は看取った戦友の手で裸にされる。そして、掛けてあった毛布でグルグル巻きにして裏口から馬そりに乗せ、ソ連の監視兵が御者となって所定の遺体置場に運ばれる。

中隊の戦友であれば、許可をもらって墓地まで送って行ったものだ。

そこは墓地とは名ばかりで、小高い山裾の窪地の、湿地帯の凍土の雪の上にコチコチに凍った裸の遺体を転がすだけだ。十分と経たないうちに横なぐりの吹雪で遺体が

※軍医…27ページの注を参照。

埋まる。その間、私たちは手を合わせて首をたれ、「この次は俺かもしれない」と思い、**冥福**を祈るだけだった。天気の良い日ならかたわらの雪で遺体をおおって埋葬が終了する。私たちはそれを雪葬と言った。

雪葬が終わると、ソ連の御者に追いたてられ、後ろ髪を引かれる思いで収容所に帰る。そして、雪葬してきた戦友が着ていた下着から毛布まで衣服一切を、消毒のため一晩ドラム缶の風呂桶で**煮沸**する。乾くと中隊で一番体力の弱った者に、

「亡くなった戦友の形見だ、これを着れば温かくなる。早く丈夫になれよ」

と言って渡すことにしていた。死んだ戦友には、

「君はもう寒くはない。生きている戦友はまだ辛い思いをしているから、勘弁してくれよ」

と、心の中で詫びるのが精一杯だった。形見をもらった戦友の中には、

※冥福…22ページの注を参照。
※煮沸…ぐらぐら煮ること。

「これは温かい」
と喜び、戦友の霊に励まされて再起する者もあった。
ところで、中央病院から送られた遺体の中には、人体実験でもされたのか解剖されたまま、捨てられた無残なものも多くあった。窪地一帯に遺体が積み重ねられ、七月の陽射しに照らされた光景はまさに地獄絵図そのものだった。
私はまず中隊全員を集めて、谷間に眠る戦友に**黙禱**した後、
「共に助けあって生きて帰ろうと、誓いあった戦友をこうして埋葬することは、生きている我々にとっては何よりも大事な作業だ。皆で良い墓を作って**冥福**を祈ろう。そして生き残った日本人としての責任を果たそう」
と、心から隊の皆にお願いした。
それから、墓地の位置を、北側に山を背負った小高い南向きの丘の上に定めた。その場所は、アムール川を遠くに眺めることができた。
川の流れは日本海に注ぎ、亡き戦友の**魂魄**はやがて日本に帰りつけるのだ、と思っ

た。辺りにはかれんな野草が咲き乱れていた。

七月下旬のある日、運搬作業班長をしていた横江軍曹が私のところへ跳んできて、

「隊長、加藤軍曹らしい遺体があります。すぐ見てください」

と言った。

「そんなはずが……」と耳を疑いながら遺体置場にかけ下りて見ると、いま氷雪の中から掘り上げたばかりで、硬直してやせ細った加藤君が、手を合わせた姿で寝かされていた。頭のはげ具合、それに特徴あるカイゼル髭、まさしく加藤君に間違いなかった。

加藤軍曹は、昨年十二月に、風邪で発熱したので、**軍医**にお願いをして中央病院に

※黙禱…無言で神や死者の霊に祈ること。
※冥福…22ページの注を参照。
※魂魄…死者の魂。
※軍医…27ページの注を参照。

入院させたままだった。

「まさかあの元気者が」と思いながら担架に乗せて、墓地中央の一番高いところに安置した。そして、原隊の戦友たち全員を集めて遺髪を切り、全員で冥福を祈った。

「ゆっくりと休ませよう」と墓地の中央部に大きな穴を掘って野花を捧げ、皆で土饅頭を盛り上げた。

いつの日か必ず迎えに来ることを誓って、その目印として小さな白樺の木を墓の北方一メートルぐらいのそばに植えた。

あの何百人もの遺体埋葬作業中に戦友横江君に発見され、戦友に見送られ埋葬されたことは決して偶然ではない。

「これこそ加藤君の霊魂が私たちを導き、そして別れを告げたのだ」と皆で泣きながら、一晩中加藤君の話が続いた。

それから毎日、作業が終わると加藤君の墓前に白樺の枯れ枝を積んで炎々と燃やし

て帰ることにした。それは加藤君をはじめ、ここに眠る戦友たちの霊に捧げる私たちのせめてもの「**鎮魂**の灯」であった。線香もろうそくもなく、僧侶もいないシベリアの荒野で、できる唯一の儀式であった。以来、夏中、日本人墓地には毎晩**鬼火**が燃えるという評判が立つようになった。

収容所長やソ連側スタッフは、そんな墓地で一生懸命に埋葬作業をする私たちに心から感心している様子だった。

私は、国や人種が違っても人間同士、皆同じなのに、なぜ戦争し殺しあわなければならないのかという、疑問をしみじみ感じたものだった。

それからも毎夜、赤々と燃える**鎮魂**の灯に戦友の**冥福**を祈りながら、

「俺たちは、いつの日か生きて日本に帰れるだろうか」

※遺髪…死んだ人の形見として残された髪の毛。
※冥福…22ページの注を参照。
※鎮魂…59ページの注を参照。
※鬼火…小雨の降る夜など、墓地や湿地に燃えてて、空中にただよう青い火。

と思う日々が続いた。その後も、埋葬作業は八月上旬まで続いた。窪地遺体置場から戦友の遺体を一人残らず正式墓地に埋葬し、私たちの任務を達成したとき、その埋葬人員は六百人を越えていた。

忘れもしない昭和二十一年八月十五日の朝、所長から、「渡辺中隊は日本人墓地整備に全員出役せよ」との命令があった。

中隊の戦友たちを励まして墓地を整備し、墓地の一つ一つに野花を捧げ周囲を清掃していると、所長以下ソ連のスタッフ一同が正装で揃ってやってきた。そして野草で作ったソ連式の大きな花輪を捧げて、ソ連式の鎮魂の儀式で祈ってくれた。

それから所長は、私たち中隊の前に立って、

「渡辺中隊の努力によって日本人墓地が立派にできた。皆さんに感謝する」

と言い、脱帽して私たちに礼を言ってくれた。

その日が日本敗戦後まる一年目であることと、私たちの戦友に慰霊をしてくれた所長に軍人としての友情を感じ、心から感謝した。

そのあと、皆で枯れ木を集め、最後の別れだと特に大きな薪火を捧げて、戦友の眠る墓地を後に収容所に入った。

収容所から見える墓地にはその後も「**鎮魂**の灯」は赤々と燃え続けていた。

（原作　渡辺時雄「鎮魂の灯」）

※鎮魂…59ページの注を参照。